

だいでず新品種「ユウヒメ」の育成について

谷 村 吉 光* 後 木 利 三** 森 義 雄*
松 川 勲* 千 葉 一 美***

大豆「ユウヒメ」は1967年北海道立中央農業試験場で、白目、大粒、良質、多収品種の育成を目的として、早生種「奥原1号」を母とし、極晩生、白目、大粒種「木造在来」を父として人工交配を行い、以後系統育種法で選抜固定を図ったものである。1975年以降「中育8号」の地方番号を付して各種試験を行い、諸会議の検討を経て、1976年6月農林水産省に新品種（だいでず農林68号）として登録され「ユウヒメ」と命名された。本品種は白目、極大粒（100粒重40g内外）で外見的品質はすぐれ、成熟期は「ユウヅル」より約12日前後早い中生種に属する。

緒 言

道央道南地帯での1979年の大豆作付面積は5,387 haあり、米の生産過剰対策としての水田利用再編成とも関連して大豆の重要性は今後ますます高まるものと思われる。これらの地帯では現在主として「キタムスメ」「ユウヅル」「北見白」等の品種が栽培されている。しかし、「ユウヅル」は熟期が遅いため栽培地帯が気象的に恵まれた一部の地域に限られ、その他の品種は粒大や品質などの点で必ずしも満足できず、熟期の早い白目、大粒、良質品種の育成が要望されていた。本品種はこれらの要望にそうものである。その育成経過、諸特性などを紹介して参考に供したい。

なお、本品種の育成にあたり、終始多大のご協力をいただいた道内の関係農業試験場担当者、現地試験を担当していただいた農業改良普及所および担当普及員の方々に厚くお礼を申し上げる。

育種目標と育種経過

1. 育種目標および両親の特性

「ユウヒメ」は北海道立中央農業試験場において、白目、大粒、良質、多収品種の育成を目的として、1976年に早生種の「奥原1号」を母とし、極晩生であるが、白目、大粒種の「木造在来」を父として人工交配を行い以来系統育種法によって選抜固定をはかったものである。

母親の「奥原1号」は1940年北海道農業試験場十勝支場で「奥原大豆」から純系淘汰によって育成されたもので、熟期は早生で、草丈低く、莢数は少ない。子実は中粒で、臍色は暗褐色を呈する。父親に用いた「木造在来」は青森県津軽平野に栽培されていた在来種で北海道では熟期がおそく未成熟に終るが、白目、極大粒種である。草丈は高く、倒伏しやすい。これら両親の交雑によって「木造在来」の白目、大粒に「奥原1号」の早熟性因子を導入し、中生、白目、大粒品種の育成を目標とした。

「ユウヒメ」の系譜を図1に、また両親の特性を表1に示した。

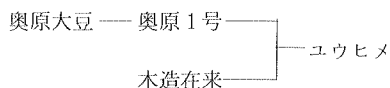


図1 「ユウヒメ」の系譜

1980年11月25日受理

*北海道立中央農業試験場,

069-13 夕張郡長沼町

**同上 (現北海道立中央農業試験場原々種農場,

073 滝川市)

***同上 (現北海道立十勝農業試験場,

082 河西郡芽室町)

表1 両親の特性（北海道立中央農業試験場 1977年）

品種名	葉形	花色	毛茸色	種皮色	臍色	開花期 (月・日)	成熟期 (月・日)	成熟期における				100粒重 (g)	伸育型
								主茎長 (cm)	主茎節 (節)	分枝数 (本)	稔実数 (莢)		
奥原1号	円	赤紫	褐	黄白	暗褐	7.17	9.22	29	10.7	3.0	39.2	32.8	有 限
木造在来	円	赤紫	白	黄	黄	8.8	達せず	78	16.8	6.4	64.8	41.4	有 限

2. 育成経過

育成経過の概略は表2に示した。1978年における世代は雑種第11代である。

人工交配（1967年）：両親は早生種の「奥原1号」と極晩生種の「木造在来」の開花が一致するように「奥原1号」は「木造在来」より1週間遅く1週間ごとに5回播種し「木造在来」は開花を早めるためにポリフィルムマルチングを行って生育促進をはかった。開花時期は「奥原1号」の後半に播種したものと一致し43花交配を行い、21莢結実し、健全粒数32粒を得た。この組合せは交配番号を中交4211とした。

F₁（1968年）：32粒播種し、開花期等から明らかに自家受精と思われるもの14個体を除き、また、生育途

中で枯死した1個体を除いて17個体から2,828粒採種した。

F₂（1969年）：1969年は登熟期の天候が不順で平年より15日早い初霜が9月24日にあった。中交4211は熟期の巾に変異が大きく、また蔓化倒伏する個体が見られた。選抜は主として、ほ場では成熟期、蔓化倒伏の程度、莢の大きさ等により、室内では脱粒後、粒の大きさ、種皮色、臍色等により行い2,828個体播種したことから27個体選抜した。

F₃（1970年）：27系統栽植した。草丈は高く草姿が比較的良かった。子実は球形で大粒のものが多かったが、種皮に亀裂を生じる個体が見られた。選抜はほ場では倒伏程度が小さく、草姿の良いものを選び、室

表2 育成の経過

年 次	1967	1968	1969	1970	1971	1972	1973	1974	1975	1976	1977	1978
世 代	交 配	F ₁	F ₂	F ₃	F ₄	F ₅	F ₆	F ₇	F ₈	F ₉	F ₁₀	F ₁₁
系 統 名								中系23号	中 育 8 号			
育 成 経 過	奥原1号 × 木造在来 ↓ 43花交配 21莢 (32粒)			1 2 ③ ⋮ 27	① 2 3 4 5	1 2 3 4 5	1 2 ③ 4 5	1 2 ② 3 4 5	1 2 3 ④ 5	1 2 ② 3 4 5	① 2 3 4 5	1 2 3 4 ⑤
					12	3	4	1	1	1	1	1
				27	32	15	20	5	5	5	5	5
		32	2,828	1,215	1,440	675	900	225	225	225	225	225
				12	3	4	1	1	1	1	1	1
供 試	系統群数											
	系統数											
	個体数		32	2,828	1,215	1,440	675	900	225	225	225	225
選 抜	系統数			12	3	4	1	1	1	1	1	1
	個体数		17 (2,828粒)	27	32	12	20	5	5	5	5	5
備 考		F ₁ 養成	個体選抜	系統選抜	系統選抜	系統選抜	生 予	生 予	生産力検定試験 奨決基本調査 性性検定試験 (マメシンクイガ、ダイスわい化病、施肥量と栽植密度) 奨決現地調査			

注：F₃以降は1系統45個体供試した。

内では脱粒後、子実の品質に重点をおき、くすんだ粒や亀裂粒の発生個体を除き12系統32個体選抜した。

F₄ (1971年)：粒大がどの系統も大きく、品質は良いが、倒伏に難点があるので、倒伏の軽微な系統を重点に3系統15個体選抜した。

F₅ (1972年)：草姿が良く、熟期は中生で粒が大きく、倒伏にやや難点があったが4系統20個体を選抜した。このうち固定度の高い1系統を次年度生産力検定予備試験Aに供試した。

F₆ (1973年)：生産力検定予備試験Aに供試した系統は「ユウヅル」に比し、収量はほぼ同程度であるが熟期早く、また粒大は「ユウヅル」より若干劣る程度の極大粒種であり、品質が良いので「中系23号」の系統名を附して次年度は生産力検定予備試験Bに供試した。選抜はこの「中系23号」の基本系統5系統中の1系統5個体を選抜した。

F₇ (1974年)：「中系23号」を生産力検定予備試験Bに供試し、同時に道内各農業試験場で系統適応性試験を行った。その結果、熟期が「ユウヅル」に比し早く、品質がすぐれ有望であると認められたので、地方番号「中育8号」を付した。

F₈～F₁₁ (1975年～1978年)：生産力検定試験に供試されると同時に奨励品種決定基本調査、同現地調査、

マメシンクイガ特性検定試験、ダイズわい化病特性検定試験、栽植密度と施肥量に対する特性検定試験等に供試された。これらの結果から「ユウヅル」に比し、粒大がほぼ同じ程度の極大粒種で品質がよく、熟期が12日前後早いなど優点が認められ、1979年1月の北海道農業試験会議、同年2月の農林水産省専門別総括検討会議(畑作・まめ類)、同年3月の北海道種苗審議会の審議をへて奨励品種に決定された。同年5月には農林水産省の新品種として登録され、「ユウヒメ」(だいで農林68号)と命名された。

性性の概要

1. 形態的特性

主茎長は「ユウヅル」より約15cm短く、主茎節数も2～3節少ない短茎種である。分枝数は「ユウヅル」よりやや多く、開張する。胚軸色は紫で、小葉の形は円、花色は赤紫、毛茸色は白、熟莢は淡褐色を呈する。粒形は豊満な球形、種皮色はやや黄白で、臍色は黄である。子実の百粒重は「ユウヅル」よりやや小さいが、約40gで極大に属する。子実の粒揃いは「ユウヅル」並みであり、種皮の亀裂粒、しわ粒は「ユウヅル」より少なく、外見的品種は良好である。

表 3 特性調査

品種名	胚軸色	葉 形	花 色	毛茸色	熟莢色	粒 形	種皮色	臍 色	粒 大	伸育型	草 型
ユウヒメ	紫	円	赤紫	白	淡褐	球	稍黄白	黄	極大	有限	短茎主茎開張型
ユウヅル	緑	円	白	白	褐	稍扁球	黄 白	黄	極大	有限	長茎主茎開張型

表 4 生育および収量調査

品種名	開花期 (月・日)	成熟期 (月・日)	成 熟 期 に お け る						a 当り収量(kg)			100粒重 (g)	品質
			倒 伏 程 度	主茎長 (cm)	主 茎 節 数 (節)	分枝数 (本)	稔 実 莢 粒 (莢)	1 莢内 粒 数 (粒)	全 重	子実重	同左比 (%)		
ユウヒメ	7.23	10. 1	0.9	48	12.1	5.3	53.5	1.91	65.5	34.1	105	41.0	上中
ユウヅル	7.29	10.13	1.5	61	14.7	4.1	56.4	1.72	62.6	32.4	100	41.8	上下

注 1) 北海道立中央農業試験場 1975～1978の4ヶ年平均

2) 倒伏程度は次の基準による。0：無，1：少，2：中，3：多，4：甚

3) 耕種概要

1区面積 (m ²)	試験設計	前作物	播種期	栽植密度 (cm)	1株 本数	a 当り施肥量(kg)				管 理 (回)		
						N	P ₂ O ₅	K ₂ O	MgO	中耕	除草	薬剤散布*
10.8	乱塊法4反復	麦 類	5月中旬	60×20	2	0.2	0.6	0.47	0.13	2	2	2

* 薬剤散布はマメシンクイガ防除，その他にダイズわい化病防除，タネバエ防除を行なう。

表5 施肥量と栽植密度に対する反応

品種名	処理区別		成熟期 (月・日)	成熟期における					a 当り収量 (kg)				100 粒 重 (g)
	施肥量	栽 植 密 度		倒 伏 密 度	主 茎 長 (cm)	主 茎 節 数 (節)	分枝数 (本)	稔 実 英 数 (英)	全 重	子実重	同 左 標準比 (%)	同 左 ユウヅル 比(%)	
ユ ウ ヒ メ	標準肥	密 植	10. 3	1.0	50	11.6	3.6	40.1	76.4	36.6	122	117	41.8
		標準植	3	1.0	47	11.9	5.3	54.1	61.0	30.1	100	99	42.2
		疎 植	2	0.8	43	11.8	6.0	69.8	54.7	27.8	92	104	41.3
	1.5倍肥	密 植	10. 3	1.3	53	12.2	3.8	39.6	80.9	38.1	127	109	43.1
		標準植	3	1.1	46	12.0	5.4	55.7	60.2	30.3	101	98	41.9
		疎 植	2	0.4	44	12.4	5.5	66.7	55.8	27.5	91	103	40.9
	2 倍 肥	密 植	10. 4	1.3	56	12.2	4.0	39.4	86.4	40.8	136	115	42.5
		標準植	3	1.1	49	12.3	5.7	56.9	65.6	32.7	109	105	42.5
		疎 植	3	0.7	44	12.0	5.7	70.6	56.8	27.8	92	96	42.6
ユ ウ ヅ ル	標準肥	密 植	10. 16	1.5	72	14.5	1.9	36.7	66.3	31.3	103	100	41.3
		標準植	15	1.0	62	14.6	4.5	57.1	61.3	30.4	100	100	41.0
		疎 植	14	1.0	57	14.7	5.8	73.0	53.1	26.8	88	100	40.9
	1.5倍肥	密 植	10. 15	1.7	67	14.4	1.7	36.6	73.6	34.9	115	100	42.0
		標準植	14	1.2	62	14.8	4.5	57.6	63.2	30.8	101	100	41.6
		疎 植	14	1.0	58	14.4	5.6	70.6	53.4	26.6	88	100	41.3
	2 倍 肥	密 植	10. 15	1.8	69	14.6	2.7	41.6	74.6	35.4	116	100	41.5
		標準植	14	1.2	62	14.8	5.0	57.8	64.0	31.0	102	100	41.4
		疎 植	14	0.8	56	14.2	5.6	75.0	57.5	29.1	96	100	41.5

注 1) 1975～1977年の3ヶ年平均

2) 施肥量 (kg/a) 標準肥: N—0.2, P₂O₅—0.6, K₂O—0.47, MgO—0.13
1.5倍肥: 標準肥の1.5倍量施用, 2倍肥: 標準肥の2倍量施用
3) 栽植密度
密 植: 60cm×10cm 2本立, 標準植: 60cm×20cm 2本立
疎 植: 60cm×30cm 2本立

2. 生態的特性

発芽期は粒の大きさが極大粒種であるため, 小粒種より1～2日程度遅れるが, 初期生育は旺盛である。開花期は「ユウヅル」より約6日早く, 成熟期も12日前後早い中生種に属する。

耐倒伏性は「ユウヅル」より強く, 普通程度の肥沃地に栽培する場合は, ほとんど倒伏しないか, しても軽微である。また裂莢性はほぼ「ユウヅル」並みである。

耐虫性, 耐病性については, マメシンクイガの被害は「ユウヅル」並みで多く, ダイズわい化病に対しては抵抗性はないが「ユウヅル」より発病率は低い(表6, 表7)。ダイズシストセンチュウに対する抵抗性因子は持っていない。また耐冷性は「ヒメユタカ」並みの中程度である(表8)。

表6 マメシンクイガの被害

品種名	虫食率(重量%)		
	早 播 区	標 準 区	晩 播 区
ユウヒメ	15.0	24.5	21.9
ユウヅル	16.9	20.5	14.6

注 1) 北海道立中央農業試験場原原種農場(滝川市) 1975～1978年の4ヶ年平均
2) 播種日は早播区(4月30日), 標準区(5月15日), 晩播区(6月15日)

表 7 ダイズわい化病の発病率

年 次	品 種 名	調査個体数	発病個体数	発病率 (%)	逆正弦変換値	同左 LSD (5%)	同左 CV (%)
1975	ユウヒメ	427	230	53.9	48.5	10.8	28.2
	ユウヅル	472	339	71.8	59.9		
1976	ユウヒメ	275	100	36.4	37.1	8.8	19.2
	ユウヅル	316	284	89.9	71.8		
1977	ユウヒメ	274	41	15.0	18.4	13.7	40.9
	ユウヅル	330	225	68.2	56.4		
1978	ユウヒメ	493	122	24.7	29.3	2.7	7.5
	ユウヅル	530	293	55.3	48.0		
4 ケ年 平 均	ユウヒメ	367	123	20.4			
	ユウヅル	412	285	71.3			

注 試験設計, 1 区 2.7 m², 乱塊法 7 反復, 自然感染による。

表 8 低温処理による影響 (無処理に対する比 %)

品 種 名	処 理 1						処 理 2				
	稔 実 莢 数 a	1 莢内 粒 数 b	100粒重 c	a×b	a×b×c	子実重	稔 実 莢 数	1 莢内 粒 数	100粒重	a×b×c	子実重
ユウヒメ	78	90	92	70	65	70	83	85	88	62	83
ユウヅル	93	87	101	81	82	71	79	96	67	51	43
キタムスメ*	86	82	111	70	78	75	95	98	86	80	78
ヒメユタカ*	81	87	95	70	67	67	81	105	86	73	76

注 1) 北海道立十勝農業試験場 (芽室町) 1976 年。

2) 無処理は全生育期間戸外で生育。

3) 処理 1 は開花盛期から 14 日間, 13~15℃で処理した。

4) 処理 2 は莢肥大開始時から 13~15℃の低温室に入れ, 無処理の成熟期に収穫した。

5) *印の 2 品種は比較品種として用いた。

3. 収 量 性

北海道立中央農業試験場における生産力検定試験 (表 3), 北海道立各農業試験場における試験成績 (表 10), 現地試験成績 (表 11) の結果収量性は「ユウヅル」とほぼ同程度であり, 熟期が早い「ユウヅル」より収量の安定性は高い。

増肥に対する反応は比較的にぶく, 栽植密度については密植で多収の傾向を示す (表 5)。

4. 品 質

子実の粒ぞろいは良く, 種皮の亀裂は「ユウヅル」より少なく白目豊満で外見的品質は良好である。

子実の粗蛋白含量は「ユウヅル」よりやや低く, 粗脂肪含量はやや高い (表 9)。

表 9 子実の成分 (無水物中%)

品 種 名	粗 蛋 白	粗 脂 肪
ユウヒメ	39.2	20.0
ユウヅル	41.0	18.5

注 1) 北海道農業試験場 1975~1977 年の 3 ケ年平均

2) 分析法は穀類自動分析計による

5. 固 定 度

1978 年に主要形質について, 群内系統間および系統内個体間の変異を調査した結果「ユウヅル」との比較において実用上支障のない程度に固定していることが認められた。

表10 奨励品種決定基本調査

場 名	品種名	試験 年次	開花期 (月・日)	成熟期 (月・日)	成 熟 期 に お け る					a 当り収量 (kg)			100 粒 重 (g)	品質
					倒伏 程度	主茎長 (cm)	主茎 節数 (節)	分枝数 (本)	稈実 莢数 (莢)	全重	子実重	同左比 (%)		
道 農 (大 野 町)	ユウヒメ	'73 }	7. 23	9. 24	0.8	62	13.1	5.2	61.9	89.9	35.4	104	41.0	3
	ユウヅル	'78	7. 28	10. 6	2.0	75	14.5	3.9	56.3	86.0	34.2	100	41.9	3
中 原 (滝 川 市)	ユウヒメ	'75 }	7. 21	9. 26	0	51	—	6.9	56.9	53.8	28.4	86	36.8	1
	ユウヅル	'78	7. 26	10. 5	0.5	63	—	4.9	56.8	65.2	33.0	100	41.8	1
上 農 (土 別 市)	ユウヒメ	'75 }	7. 21	9. 30	2.3	66	12.6	7.7	55.9	57.2	25.8	85	35.1	上下
	トヨスズ	'78	7. 15	10. 6	0.3	51	10.4	5.3	63.7	60.3	30.4	100	32.9	中上
北 農 (訓子府町)	ユウヒメ	'75 }	7. 30	10. 7	2.1	63	12.2	5.1	53.4	55.3	24.9	102	32.6	2
	トヨスズ	'78	7. 25	10. 10	0.6	48	10.0	3.8	53.7	51.1	24.3	100	28.9	2
十 農 (芽 室 町)	ユウヒメ	'75	7. 27	9. 30	0.9	48	12.2	5.6	46.3	44.3	24.1	88	37.2	1 下
	ユウヅル	}	8. 1	10. 15	1.7	65	13.9	6.0	51.5	57.0	29.0	105	40.3	1 下
	トヨスズ	'78	7. 20	10. 10	0.3	46	10.6	4.0	51.9	51.1	27.5	100	32.4	1 下

注 各農業試験場とも標準栽培法，3 反復による。

表11 現地試験成績

地 帯	実施場所	試験 年数	成熟期 (月・日)	成熟期 の 差 (日)	a 当り 子実重 (kg)	同 左 ユウヅル比 (%)
空 知	幌加内町*	1	10. 2	— 3	38.3	129
	深 川 市*	3	9. 28	— 3	30.0	97
	滝 川 市	4	9. 30	— 9	31.7	98
	岩見沢市*	1	9. 23	—13	33.4	98
石 狩	恵 庭 市 **	1	9. 24	—13	31.4	105
	新篠津村	1	9. 28	— 5	42.7	125
後 志	共 和 町	4	10. 1	— 6	23.3	99
	蘭 越 町	3	9. 26	—12	29.1	102
	倶知安町	4	10. 3	— 8	27.0	116
	京 極 町	3	10. 4	—12	23.5	100
	真 狩 町	2	9. 28	—10	39.5	118
日 高	平 取 町	4	9. 24	—13	26.9	110
胆 振	伊 達 市	2	9. 18	—10	28.5	91

注 1) *は「トヨスズ」との比較

2) ** は水田転換初年目圃場実施

3) 成熟期の差：—は「ユウヅル」より早いことを示す。

適応地帯および栽培上の注意

1. 栽培適応地帯

奨励品種決定基本調査、同現地調査等の結果から、「ユウヒメ」は空知の中部以南、石狩、後志（羊蹄山麓を除く）、胆振、日高およびこれらに類似する地帯に適しこれらの地帯に栽培されている「ユウヅル」「北見白」「キタムスメ」「トヨスズ」などにおきかえる。

2. 栽培上の注意

(1) 「ユウヒメ」は「ユウヅル」なみの極大粒種で、中～小粒種に比し発芽にやや多くの日数を要し、発芽率が低下することがあるので、必ず種子消毒を行うこと。

(2) ダイズわい化病に対しては他の品種と同様、抵抗性をもたないので防除を励行すること。

(3) マメシンクイガの被害は、大粒種は概して被害が大きく、そのため品質を著しく損うことがあるので必ず防除を行うこと。

(4) 茎長が短いため、疎植よりはやや密植することによって多収が得られるので、a 当り 800 株程度の株数を確保すること。

その他は「ユウヅル」の栽培に準じておこなえばよい。

論 議

中央農試における大豆の育種は 1966 年より開始され、以後継続実施されている。育種目標は道央、道南地域における晩生、大粒、良質、多収品種の育成をねらいとしている。「ユウヒメ」は中生、大粒、良質、多収品種で上記目標と必ずしも一致しないが、収穫、乾燥等の農作業の面から中生種の要望が強くこの品種が育成された。

北海道における大粒、良質（ここでは外観的な質をいう）種は銘柄「大粒つるの子大豆」で代表されている。「大粒つるの子大豆」は子実の大きさが 8.5mm（およそ 100 粒重が 39g）のふるい目に残るものである。現在「ユウヅル」「鶴の子」等が指定品種であり、主として道南地域で栽培されている。「ユウヒメ」が「大粒つるの子大豆」に銘柄指定品種となり得るかどうかは、粒形、種皮色、粒色等から今後検討されると思われるが、極大粒大豆が道央地域で安定して栽培可能になった。

ダイズわい化病は北海道、東北部地域で主要な病害の一つである。ダイズわい化病に対して人工接種法による検定では現在まで強抵抗性をもった品種は確認されていない。

ただ、ほ場における罹病性程度の軽い品種が 20 品種ほど明らかにされている。これらの品種を母本として抵抗性品種育成を行っているが、なかなか困難な面が多い。「ユウヒメ」は「ユウヅル」に比してダイズわい化病の発病率が低く、罹病性程度も軽いが、抵抗性因子はもっていない。現在、ダイズわい化病は薬剤による防除が確立されているとはいえ、耐病性品種の育成を急がねばならない。

豆作の機械化は他の作物に比し遅れている。とくに、収穫体系が問題である。収穫作業で作物的に問題なのは裂莢性、最下着莢位置、分枝の状態、倒伏等である。裂莢性は道央地帯では秋季の天候が十勝地方でみられるような乾燥状態が続くことが少ないので大きな問題とはならない。最下着莢位置については「ユウヒメ」は必ずしも高くなく、また、分枝が比較的下の方から発生するので、疎植にならないよう気をつける必要がある。倒伏は「ユウヅル」より倒伏しないが、極端な密植、多肥栽培は倒伏する恐れがあるので注要を要する。今後は「ユウヒメ」の粒大、品質、熟期を維持しながら機械化栽培向きの品種を積極的に進めなければならぬだろう。

今後、大豆の栽培は稲転ほ場での作付が増大することが予想される。稲転ほ場は 2 年目からは普通畑とほぼ同様に考えてよいが、初年目は整地に充分気をつけることは勿論であるが、一般的に水田は酸性土壌が多く酸度矯正を行う必要がある。また、酸度矯正を行った場合でも根粒菌の付着状態が悪い場合があるので、根粒菌の着生状態を常に観察し、場合によっては追肥等を行う必要があろう。

付 1 育成担当者

育成担当者	年 次	世 代
諏 訪 隆 之	1967 ～ 1969	交配 ～ F ₂
森 義 雄	1970 ～ 1975	F ₃ ～ F ₈
後 木 利 三	1976 ～ 1978	F ₉ ～ F ₁₁
千 葉 一 美	1967 ～ 1974	交配 ～ F ₇
谷 村 吉 光	1967 ～ 1978	交配 ～ F ₁₁
松 川 勲	1975 ～ 1978	F ₈ ～ F ₁₁

付2 系統適応性検定試験，特性検定試験

奨励品種決定基本担当者

農 業 試 験 場 名	担 当 者
北海道立道南農業試験場	山崎 健，山崎 一彦
北海道立中央農業試験場 原々種農場	森本 重也，小林 敏雄
北海道立上川農業試験場	国井 輝男
北海道立北見農業試験場	後木 利三，佐藤 久泰
北海道立十勝農業試験場	砂田喜与志，三分 一敬 酒井 眞次，土屋 武彦 佐々木紘一，紙谷 元一

引用 文 献

- 1) 北海道立中央農業試験場“昭和55年度大豆育種指定試験成績書”。(1978).
- 2) 砂田喜与志，佐々木紘一，三分敬一，酒井眞次，土展武彦，斉藤正隆.“大豆品種「ヒメユタカ」の育成について”. 北海道立農試集報 38, 62～72 (1977).
- 3) 諏訪隆之，森義雄，千葉一美，谷村吉光，砂田喜与志，志賀義彦.“大豆品種「ユウヅル」の育成について”. 北海道立農試集報. 25, 59～69 (1972).

New soybean variety "Yûhime"

Yoshimitsu TANIMURA, Toshimitsu USHIROGI, Yoshio MORI,
Isao MATSUKAWA and Ichimi CHIBA.

Summary

A new variety "Yûhime" of soybean (*Glycine max* (L.) Merr) was selected from among progenies of the cross between two varieties by Hokkaido Central Agricultural Experiment Station. The first one is "Okuhara no.1" which was selected from a local early-maturing variety "Okuhara daizu", and the second is "Kizukuri zairai" a local variety in the northern parts of the Tôhoku region, which is characterized by a yellow hilum and a large seed size.

The new variety was registered and released in 1979 as a recommended variety in Hokkaido. Before the release it was identified as a breeding number "Chûiku no.8".

Concerning maturity, it is classified in to Group II; maturing 12 days earlier than a control variety "Yûzuru", it belongs to the middle-maturing variety. It is adaptable well to the following: central and southern parts of Sorachi district; Ishikari district; Hidaka district; Shiribeshi district except Yôtei piedmont areas; the similar areas to these districts in Hokkaido.

The purple flower, gray pubescence, broad leaflet, yellow seed coat, yellow hilum and determinate growth habit constitute the main characteristics of the new variety.

Weighing about 40 grams per 100, the seeds excel in quality by a good appearance.

It is lower in protein content and higher in oil content than "Yûzuru".

Approximately 50cm tall, its plant is shorter in height and lodges slightly less than the plant of "Yûzuru". Its branches tend to grow relatively wide.

It has almost the same seed yield as "Yûzuru"; its seed yield is stable.

The new variety is susceptible to soybean dwarf disease and soybean cyst nematode.